

第2章

UCBオーラルヒストリースクールで学んで

加藤 直子 総研大全学事業推進室・葉山高等研究センター

1. オーラルヒストリーを学ぶ経緯について

カリフォルニア大学バークレー校(UCB)で毎年開催されている「オーラルヒストリー夏の学校」に参加した体験を中心にお話しさせていただきます。

この学校は、Advanced Oral History Summer Institute という英語名で実施されていますが、その実施主体は、UCB バンクロフト・ライブラリー (Bancroft Library) の中にある、Regional Oral History Office (ROHO) で、2002 年から毎年夏に開催されています。1954 年に活動を開始した ROHO は、コロンビア大学内の Oral History Research Office (1948 年設立) に続いて、アメリカで二番目に古いとされています。

(左) UCB のシンボル、Sather Tower

(下) ROHO のオフィス 製本されたオーラルヒストリーのトランスクリプトが並んでいる

ROHO のオフィス運営の概要については、すでに 2005 年秋に開催された核融合科学研究所でのワークショップをはじめ学内での報告等で紹介させていただきましたので、今回は主にこのサマースクールに参加した理由や経緯、そしてどのような講義が行われたかについてお話しさせていただきます。

1.1. 「大学共同利用機関の歴史」プロジェクトに関わって

最初に、総研大葉山高等研究センターのプロジェクト「大学共同利用機関の歴史」の中で、なぜオーラルヒストリーに取り組むことになったのか、その経緯を簡単に紹介しておきます。

「大学共同利用機関の歴史」研究プロジェクトの前身は、2002 年に遡ります。当時私は、総研大葉山キャンパスの教育研究交流センターの教務補佐員として働いていました。11 月ごろのことです。センター長の平田光司先生から、「大学共同利用機関の歴史が非常におもしろいと思うので調べたい。適当な情報を集めて、各機関の設立年と簡単な設立の経緯などをまとめてほしい」という依頼がありました。

その頃の私は総研大で働き始めて半年余り、従って各大学共同利用機関についてはほとんど知識がありませんでした。当時総研大に参画している大学共同利用機関は全部で 16 を数えましたが、各機関から取り寄せた要覧や年報などの各種発行物や各機関のホームページなどを利用して、ともかく設立年と簡単な設立経緯をまとめることにしました。ところが、その設立経緯が複雑な機関も多く、2 つ以上の機関が前身となって改組、統合を繰り返し、明確に何年設立と記載されていない場合があり、迷った挙句に直接電話して詳細を確認することにしました。

大代表に電話して簡単に自分の用件を告げると、たいてい最初は総務か広報部門に回されます。ところが、「実際の設立年は何年と考えればよいのでしょうか」と質問すると、図書室や古くから在籍している事務職員などに次々と回された上、要覧に記されている以外のことは結局分からずじまいでした。「〇〇大学からそのままいらっしゃった△△先生なら、その

経緯に詳しいと思うのですが、もう退官されていますし」

今から思えば、いきなり電話する当時の自分にも呆れてしまうのですが、総研大で働き始めるまで民間企業での経験がほとんどである私にとって、会社四季報のように「創立〇年△月」とはっきり記載されていないことが理解できなかったのだと思います。要覧と機関のホームページで「設立年と簡単な設立の経緯をまとめる」という作業自体が簡単なものではないことを思い知りました。ともかくも、電話でお聞きした内容も含めて状況を何とかエクセルファイルにまとめ、一覧表にして平田先生にお渡ししました。

各機関の担当部署の職員が各機関の歴史を正確に把握していないことに問題意識も感じましたが、それ以上に、改組・統合の経緯や前身と呼ばれる研究所の存在、大学と大学の関連など、要覧に記されていない事実があることを知り、興味深く思ったことを記憶しています。

その後、国立大学法人化元年である 2004 年に、葉山高等研究センターのプロジェクト「大学共同利用機関の成立に関する歴史資料の蒐集とわが国における巨大科学の成立史に関する研究」（略して「大学共同利用機関の歴史」、代表・平田光司教授）が正式に発足し、私もメンバーの一人として取り組むことになりました。

1.2. オーラルヒストリーとの出会い

2004 年夏、UCLA のシャロン・トラウィーク先生が総研大葉山キャンパスに來学され、大学の共同利用機関の歴史を調べる手法の一つとして、オーラルヒストリーが有効ではないかというアドバイスをいただきました。このとき初めてオーラルヒストリーという言葉を知った私は、それがなぜプロジェクトにとって有効となるのか、そしてそもそも「オーラルヒストリーとは何か」に興味を持ち、本やウェブなどで調べることにしました。

そこでアマゾンで検索した際、最初に出てきたのが、『オーラルヒストリー』（御厨貴著、中公新書、2002 年）でした。この本を読んで、オーラルヒストリーについてある程度理解できましたが、政治学者としての著者

の経験談やエピソードが多く、自分が最も知りたい方法論についての記述がほとんどありませんでした。オーラルヒストリーが他の「インタビュー」とどう違うのか、そこが知りたいと思いました。そこでさらに知見を深めるため、御厨先生が毎年夏に主宰されている「オーラルヒストリー夏の学校」に参加申し込みをしました。しかし定員を上回る申し込みがあり、大学院生優先ということで参加を断られてしまいました。“oral history”という用語でウェブを検索すると非常に多くのページにヒットしますので、欧米では既にオーラルヒストリーが非常に盛んであることは分かっていたのですが、日本においてもオーラルヒストリーに高い関心が集まっていることを初めて認識しました。

次に、オーラルヒストリーを用いた日本の高速道路建設の歴史研究についてのワンデイ・セミナーを日本土木学会が開催することを知り、そこに参加しました。2004年11月のことです。そのときの講師は、御厨貴先生と伊東孝先生(日本大学理工学部社会交通工学科)でした。

このセミナーの経験をふまえて、日本はまだオーラルヒストリーの分野では後進国であること、また多くのオーラルヒストリー記録が個人研究者の手元に留め置かれており、わが国においてアーカイブズとして保管・公開されているオーラルヒストリーはほとんど存在しないことを知りました。このセミナーで日本の現状を知った私は、総研大のプロジェクトにとって、オーラルヒストリーの先進国であるアメリカやイギリスの研究動向を調べるのが急務であると感じました。

そこでこれまでに調べた経験の蓄積をまとめ、2004年12月に、「総研大におけるオーラルヒストリーの展望」として、総研大葉山高等研の刊行物「<科学・技術・社会>論の構築」に投稿しました。大学共同利用機関の歴史研究の手法としてオーラルヒストリーが有効であることを提示し、それがなぜ有効であるのかを解説するとともに、総研大のプロジェクトにはどのようなオーラルヒストリー実践が必要であるのか、そして自分はどうに関わっていききたいかというプロポーザルをまとめたものです。

その原稿を執筆中の過程でウェブを検索する中から、ROHOの夏の学校のことを知りました。1週間にわたって開催されるこの夏の学校に参加す

ることによって、現在アメリカで行われているオーラルヒストリーの概要を知るのに大変よい機会であると思い、参加の希望を固めました。密かに”Application Form”を用意して準備を始めたものの、私には全学事業推進室の業務があり、実際に1週間も休めるかなど乗り越えなければならぬ問題も山積しており、まだ上司に相談できないでいました。

2005年4月に、UCLAのシャロン・トラウィーク先生が再度総研大に来学されました。その時に、2003年に設立されたばかりの日本オーラルヒストリー学会(JOHA)創立に携わった山本恵理子博士を紹介いただきました。早速大学共同利用機関の研究にオーラルヒストリーの手法を活用したいと相談申し上げたところ、「JOHAでも第1回オーラルヒストリー実践講座を計画しているので参加したらどうか」と勧められました。そこで、2005年4月下旬に、横浜で行われた第1回JOHAオーラルヒストリー実践講座に参加しました。内容は、オーラルヒストリーの概要と実践で、講師は、社会学者の桜井厚先生(千葉大・当時/現立教大社会学研究科)と酒井順子博士でした。酒井博士は、イギリスで社会学の博士号を取得され、欧米でオーラルヒストリーのスタンダードな教科書の1つとされている『記憶から歴史へ——オーラルヒストリーの世界』(ポール・トンプソン著)の翻訳者です。

この講座は講師に恵まれ、内容もとても実りあるものでした。参加者は50人位だったと思います。たまたまインタビュー実習の席で講師の桜井厚先生と隣り合わせになり、約30分間、お互いにインタビューし合う幸運に恵まれました。桜井先生はとても経験豊富でインタビューが上手でいらっしゃるのので、初対面なのについて調子に乗って個人的なことをいろいろお話してしまうほどでした。また、この経験を通じて、インタビューにも方法論やスキルが非常に重要であることを痛感しました。

このJOHA第1回実践講座のちょうど1年後に開催されるJOHA第2回実践講座の場で、今度は自分が参加者の前に立って話をするようになるなど、この時は想像すらできませんでした。

2. 「ROHOの夏の学校」への参加

2.1. 「夏の学校」に参加するまで

2005年7月に、再度シャロン・トラウィーク先生が総研大に来学されたので、自分の書いた”Application Form”とROHOのプログラムを持参し、「ROHOの夏の学校に参加したい」と相談申し上げたところ、「このプログラムを見る限り内容も素晴らしく、プロジェクトにとっても参加する価値がある」と評価していただき、参加の決心を固めました。また、トラウィーク先生は私が参加することについて強く推薦くださり、晴れて参加実現の運びとなりました。私に大きなチャンスが訪れたのです。

ところが、8月15日が開催予定日であるため、その時（7月中旬）すでに申し込みの締め切り日は過ぎていました。諦め切れない私はそこで直接先方に電話し、まだ1人か2人なら空きがあることを確認した上で、急いでアプリケーション・フォーム（申込書）を完成させ、ROHOに提出しました。申込書には、自分が関わるプロジェクトにオーラルヒストリーをどのように生かしたいかなど、オーラルヒストリーに関する自分の経験と参加に関する抱負を細かく書く必要がありました。その後、受け入れ承諾の返事があり、すぐさま指定された通り参加費700ドルのcheckを用意し、郵送しました。

実際のクラス分けのために、アプリケーション・フォームよりさらに詳しいプロジェクト・ステートメントを書く必要があり、これにもかなり時間をとられました。参加まで2週間と迫っているのにもかかわらず、ROHOへの提出書類に加えて原議書の作成、参加理由書の作成など、学内の種々の手続きに時間がかかり、準備は遅々として進みませんでした。出発前日まで航空券、宿泊先の手配もあわただしく進めましたが、UCBの新学期準備期間と重なることもあり、現地の宿泊施設はどこも満室で、結局1日宿泊先が決まらない日を残したまま、不安を抱えて出発することになりました。

2.2. 多様な参加メンバーと和やかな雰囲気

2005年8月14日、いよいよパークレーに到着しました。「夏の学校」は8月15日からの開催ですが、「せっかく参加を実現させたのに、開催場所 Townsend Center が分からないことで遅刻などでは大変」と、前日に場所の確認をするためです。UCB では毎週日曜日に学生ボランティアによる無料キャンパスツアーが行われており、そのツアーに参加しました。このツアーに参加して、図書館や食堂、緊急非常電話の位置など1週間の生活に必要な場所を覚えることができました。また、学生ボランティアが語るUCBや学生生活のウラ話はとても楽しく興味深いものでした。

キャンパスツアーの様子

そして8月15日。受付で分厚い“reader”(リーダー)が配布されました。このリーダーは、ROHOの講師が選んだオーラルヒストリーに関する様々な参考文献のコピーや、ROHOで使用している同意書などの資料が収められており、毎日講義終了前に、明日までに読んでくる内容が指示されます。私は英語圏の参加者と比べてどうしても英語を読む速度が遅いことから、他の参加者が1、2時間で読了するところがその何倍もかかり、ほとんど毎晩寝られない状態でした。

参加者はアメリカ人が多かったのですが、日本やイギリスからも参加者がありました。職業は、大学の研究者、大学院生、学芸員、図書館職員などで、分野は歴史学・文化人類学・社会学・グラフィックデザイン・コミュニケーション・地理学・化学・天体物理学など多岐にわたっていました。自分の専門分野を研究するための手法としてオーラルヒストリーを学びたいという動機が多かったと思いますが、なかには科学の分野で自分のたどってきた道について見つめなおしてみたい、という個人的関心から参加した、すでに退官した研究者もいらっしゃいました。

年齢もさまざまで、20代の大学院生から引退後の70代まで。夏休みという季節柄か、それともUCBという開放的雰囲気からなのか、みなすぐに打ち解けることができました。たとえば、こんなことがありました。初日に講師の Lisa Rubens 氏が、繰り返し“Defining Your Problematic”が大切だと説くのです。“problematic”は形容詞なのに、どういう意味なのだろう？と、こっそり昼食時にある大学の建築学の研究者に聞いたところ、「私も分からないわよ、Just think it as “problem”」と言われて、ふっと肩の力が抜けたのを覚えています。

すでにオーラルヒストリアンとしての経歴が豊富な参加者だけでなく、まだオーラルヒストリーに関しては初心者という私のような参加者も複数いて、昼食時や夕食時の参加者同士の意見交換からも多くを学ぶことができたと思います。

2.3. 実際のプログラムと進め方について

実際のプログラムは下記のような形式・内容で進められました。

- ・自己紹介
- ・ファカルティ (Faculty) による講演 (1回 90分程度)
- ・全体ディスカッション
- ・少人数によるディスカッション (アプリケーション・フォームやプロジェクト・ステータメントの内容による)
- ・参加者の実践例の紹介
- ・ROHO プロジェクト紹介、ワインパーティ (Food & Wine プロジェクト)
- ・グループ発表 (最終日)

自己紹介は、全体の前での1回と少人数のグループに分かれての1回で、計2回行いました。

講演は、ROHO のファカルティの他、サンフランシスコ州立大学など近隣の大学の講師を含め7人の講師が、1人ずつ90分程度の講演を行いま

した。

私の印象に残ったのは、ROHOの所長であるRichard Candida Smithの講演“Oral History and Circuits of Subjectivity (オーラルヒストリーと主観性の回路)”です。特に、彼が何度も繰り返した「オーラルヒストリーはart of memoryなのである」という言葉でした。つまり、オーラルヒストリーを芸術作品に例えて、記憶から生じる言葉の芸術であるというのです。ある出来事について、日記に書いた時点や記憶にした時点ですである解釈が選択されており、その後でオーラルヒストリーにより聞き手や語り手が相互作用しながらストーリーを作り上げていくというプロセスにより、記憶は再構築されていきます。

したがってオーラルヒストリーはエビデンスそのものにはなりえず、その点での限界を認識する必要があります。しかし、だからといって信用できないと切り捨てるのではなく、オーラルヒストリーの限界と性質を十分に理解した上で、他の歴史資料などと組み合わせて活用することにより、立体的な歴史があらわれてくると主張しています。すなわち、オーラルヒストリーだけに頼るのではなく、その長所と短所を理解した上でうまく活用することが大切だということです。

講演も和やかな雰囲気で

アメリカでは現在、ビデオ映像などを活用したドキュメンタリーに近いオーラルヒストリーが盛んになっています。参加者による実践例では、語り手のお気に入りの風景や物の映像とともに記録されるオーラルヒストリーや、座って語られる静的なインタビュー記録ではなく、

画面背景を語り手の自宅の庭、室内と順に移動しながら、より動的なインタビューを含めて大胆に編集された実践例も紹介されました。この“art of memory”という感覚は、これからもますます重視されていくだろうと感じました。

2.4. 少人数グループによるセッション

少人数でのディスカッションは、最初に提出したアプリケーション・フォームやプロジェクト・ステータメントの内容によって、グループごとに分かれて行います。和やかな雰囲気が進められるため、私でもたやすく質問することができました。

また非常によかったのは、少人数のセッションが昼食前に設定されているため、ワークショップの後は、自然にグループ同士でカフェテリアに向かい、そこでさらに情報交換ができたことです。この時間は、私には非常に貴重でした。同じような関心をもつ経験豊富なオーラルヒストリアンに、どのような質問をしているのかなどを聞くことができたからです。これは、後で自分が実際にオーラルヒストリーを計画する際の質問票の作成にとっても役立ちました。

ワークショップの様子

また先に出発前に宿泊先が1日だけ確保できなかったことをお話ししましたが、昼食時に参加者の一人でバークレー市内に住む Sherry Keith 博士（社会学者でサンフランシスコ州立大学の教員）が快くホームステイを申し出て下さいました。自宅に滞在させていただく間に、社会学者である彼女からもいろいろな知見を得ることができました。また、彼女の同僚のホームパーティにも同席させていただき、こうしたインフォーマルな交流から、研究者としての情報交換の場を多数得ることができたことがとても幸運であったと感じています。

4日目の夜は、図書館の一室でワインパーティが開かれました。ROHOではカリフォルニアにおける農業の歴史や、カリフォルニアのワイナリーについてのオーラルヒストリー・プロジェクトがあります。ROHOの副所長をされている Vic Geraci 氏が率いる“Food & Wine Project”の紹介と、

クイズなどで盛り上がるワインパーティ

彼の最近の著作“Salud!(乾杯!)”のお披露目にちなんでワインパーティが開催されました。いろいろなワインを飲んでその産地を当てるクイズや、カリフォルニア・ワイナリーの様子がスライドで上映され、カリフォルニアの食文化の一端に触れることができました。

グループ分けの段階で割り当てられたテーマに基づき、最終日にはグループ討論の成果を発表しました。グループごとに発表方法はさまざまで、「良いインタビュー」「悪いインタビュー」の実例として寸劇を披露し、大いに場を盛り上げたグループや、前もってメンバーそれぞれのコメントをビデオに収録して上映するグループもありました。

私のグループは最後までまとまらず、結局、一人ひとり自分がどう感じたか、これから何をしていくか、あるいはこの学校に参加して自分の視点がどう変わったかを話すことになりました。私は ROHO で学んだことをふまえて、早急に質問票と同意書を作成し、オーラルヒストリーを実践したいということを話しました。この夏の学校に参加することで、日本に帰ってから自分が取り組むべき方向性が明確になったのです。

2.5. その後のオーラルヒストリー実践に向けて

この夏の学校の体験を踏まえて、2006年1月には、総研大で開催された国際シンポジウムにおいてポスター発表し、総研大のオーラルヒストリー・プロジェクトの紹介をしました。このポスター発表で、総研大の教員だけでなく、各国から舞い戻った総研大の卒業生にもプロジェクトへの興味をもっていただくことができました。ただし、実際にオーラルヒストリーの「語り手」になることについては、「最初の一人にはなりたくない」「質問の内容によっては、自分の指導教官との関係を気にしてしまう」「ウ

ウェブで不特定多数に見せることはしないしてほしい」など率直な意見が寄せられました。プライバシーの問題などで躊躇する人が多く、質問表の作成も含め、オーラルヒストリーの実施にはまだまだ数多くの困難があることを実感しました。

2006年3月に、JOHAの第2回オーラルヒストリー実践講座の席上で、総研大におけるオーラルヒストリーの取り組みを紹介しました。科学の分野でのオーラルヒストリーが日本ではまだ真新しいこともあり、参加者からの反響も大きく、自分たちの取り組みの意義を再確認することができました。わが国におけるこれまでオーラルヒストリーは、労働史やマイノリティの歴史などの分野が盛んであり、ライフヒストリーの記録に重点が置かれてきました。大学共同利用機関の歴史をオーラルヒストリーという個人の記憶から描いていくという総研大のプロジェクトの視点は新しく、かつユニークであり、今後順調に発展させていく必要性を強く感じました。

本日は時間の関係で、実際に私が実践したオーラルヒストリーの映像をお見せすることができませんが、それはまたの機会に譲りたいと思います。